

卵は命なんだ

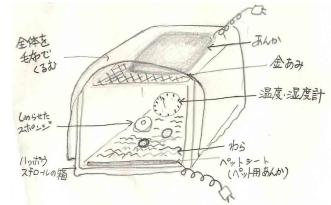
卵と出会った時には、初めは「卵は命あるもの」として捉えていない子どもがいます。卵と触れ合い、「元気なヒヨコが生まれるように」と心を込めて大切に関わることで、卵への愛情を深めていきます。やがて、「卵は命なんだ」という大切なことに気付いていく子どもたちの体験を重ねる過程に、「科学する心」が育まれていることが分かります。

子ども（5歳児）

幸田町立大草保育園

移動動物園の来園時にアイガモが2個の卵を産み落とす。この偶然の出来事から「たまごプロジェクト」がスタートした。

アイガモの卵との出会いは子どもたちの『ハテナの心（好奇心）』＝科学する心が動いた瞬間であった。「ヒヨコ生まれる?」「卵を温めんといかんよね」「毛布に入れる?」「コタツは?」「ポケットで温めたい」子どもたちの期待が膨らむ。ヒナが生まれると信じて、手作りの孵卵器で卵を温め始める。



活動を楽しむ（期待にむねを膨らませる）

- ・ 転卵を始める。2クラス。各2名ずつ計4名がヒヨコバッチを付け、誇らしげに職員室に転卵にやってくる。蓋を開け、割れないように優しく卵を転がす。卵を手にするると自然と声が出る。子どもたちは「温かい」「気持ちいい」「卵ツルツル」「早く生まれておいで」と、期待に胸が膨らむ。
- ・ 転卵の時に感じたことを、文字や絵で「たまご日記」に記録した。温度や湿度も一緒に記録した。

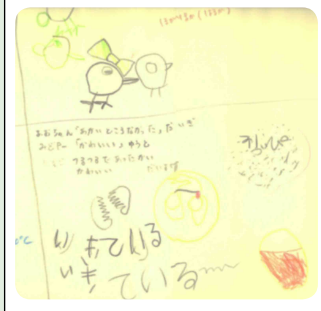
たまご日記から

11/15 孵卵器に入れる。
36℃、50%「卵つつつ」

11/26 血管が見えた。



11/28 いきている。いきている。



ハプニングが発生（対策を考える）

- ・ 卵から生まれる予定の日になったが生まれない。職員は検卵し、孵化が中止していることを確認。

保育者：「卵を温めて今日で28日になります。そろそろ生まれるはずが、変化がありません。どうしよう」などと、子どもたちに保育者の心配と現状を伝え相談する…。

Aさん：「暖かいからずーっと卵の中にいたい（孵卵器の中は暖かい）」 Bさん：「冬だから、寒そうだから、卵の中にいたい（12月は寒い）」 Cさん：「寒くて寒くて、まだ寝ていたい（外に出るには寒すぎる）」

Dさん：「お母さんのお腹の中じゃないから。ママがいないから出れない」「お母さんが優しく温めるでしょう。だから、怖くて出れない（お母さんが温めていないから怖い）」

Fさん：「1回温度が下がったから。前、卵当番の時36℃だった」（状況を振り返っている）

Dさん：「あっ。分かった。鳥さんの巣に返してあげて、ちょっと温めてもらう」

Gさん：「巣に戻して、待てばいい（母鳥の力を借りたい）」 Dさん：「40℃とかにすればまだ生まれる」

Hさん：「暖房の近くに置けばまだ生まれる。職員室を暖かくするといい」

Cさん：「今度は1日6回ぐらい、ひっくりかえしてみればどう？」

Gさん：「ゆっくり回せば温まるかな？」 Dさん：「手で温めれば？手が温かい人が…」

Dさん：「人の手じゃ生まれない。本当のお母さんだったら生まれるかも」

Hさん：「前、冷たい手で触ったから出てきたくなくなっちゃった」（自分の行動を振り返る）

Dさん：「これもみんなヒントだから（みんなの意見）全部を合わせて、みんなで協力したら生まれると思う」（今後の方向性を考える）

Bさん：「動物園の人にお知らせする。それで教えてもらう。やり方」（今後の方向性を考える）

Iさん：「誰か割ると思ったけど、誰も割らなくてすごかったね」（自分たちへの有能感・仲間意識）

【「卵は命なんだ」と、「大切な命のひとつなのだ」と気付く子どもたち…】

孵化を諦めきれず涙する子どもたち。見た目に変化のない卵から生まれないことを理解することは難しかった。と同時に命の大切さを感じとった瞬間であった。卵に出会い、卵を転卵させて孵化を待つ間に、卵の暖かさに触れ「生きているんだな」と感じていたのだろう。子どもたちの卵に対する深い思いやりと優しさに触れた。失敗の原因は温度管理であった。ヒナが見たい。諦められない気持ちから、再びウコッケイ、ウズラの孵化に挑戦する。そしてウズラのヒナが誕生する。手探りで失敗続きで悩んだだけに喜びはひとしおであった。子どもたちの目の前に現れた小さな命は、興味と関心の的となった。

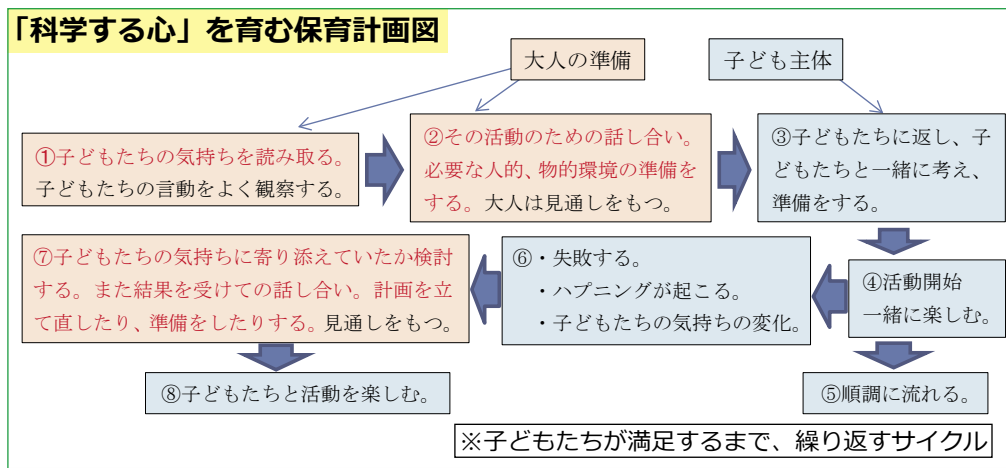
自然との関わりでは、人の力では、どうにもできないことに出会います。そのような時、それを受け入れ、子どもたちの視点に立って、保育を見つめ直すことが必要になります。この事例は、柔軟に計画を立て直し、子どもの思い・気付きを大切に活動を展開することで、「科学する心」を育てている実践です。16ページの事例を保育者の計画という視点から見つめ、園全体で共有しています。

保育者（子どもに寄り添った計画と計画の見直し）

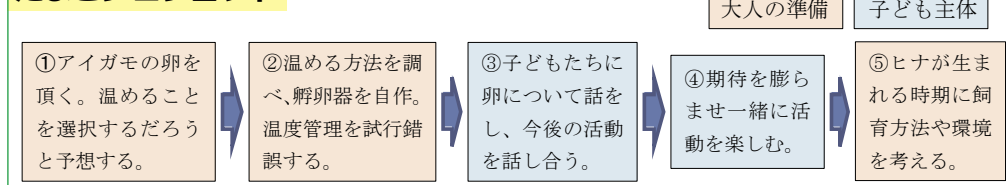
幸田町立大草保育園

子どもたちの主体的な生活を大切に計画を立てるために

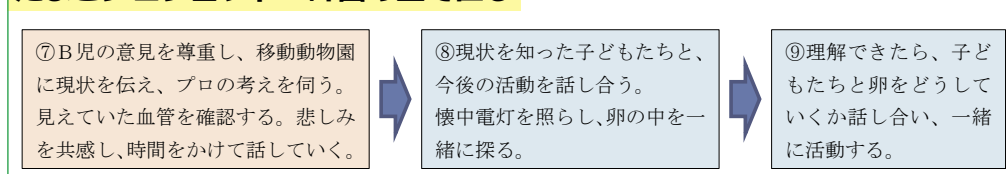
子どもたちに寄り添い、声に耳を傾けていくと、予定していない思いがけないことに、興味や関心が向いていることに気付くことが多々ある。これが好奇心（ハテナの心）＝科学する心であり、その要求に応えるため、その都度保育者間で話し合いをもち、そのための計画を立てている。またその途中で、予期せぬ出来事やハプニングに見舞われた時も同様に話し合い、計画の立て直しを行っている。



たまごプロジェクト



たまごプロジェクト・計画の立て直し



【たまごプロジェクトを通して～保育者の気付き～】

- ・ 命の誕生に大喜びしたり、儚い命に気落ちしたりした。目の前で命が生まれ、目の前に動かなくなった命があることを体験した。元気に生まれることの難さを知った。鳥の形をしていない卵に命を感じ、「次は元気に生まれてね！」と新しい命に期待を寄せる。そして「たまごは命なんだよね」と子どもたちの心が命を感じていく。この言葉に成長を感じ、保育の成果と喜びを得た。
- ・ 待ちに待ったヒナが誕生した時、子どもたちは、新しく誕生した命を感じ、体全体で喜びを表現していた。「本当によかった」子どもも大人もうれしくホッと胸を撫でおろした。手探りで失敗続きで、たくさん悩んだだけに喜びはひとしおだった。しかし、喜びだけで終わってはいけない。この小さな命をどのように大切に育てていくのか？どう守っていくのか？生き物を最後まで責任をもって育てていく大変さも伝えていかなければならない。